



ヴィーコとディルタイ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): Vico, Dilthey 作成者: 柳沢, 謙次 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/178

ヴィーコとディルタイ

柳 沢 謙 次

(法 学)

Vico and Dilthey

Kenji YANAGISAWA

Law

Abstract. We perceive that Vico and Dilthey have coincidence in their viwes. But Ortega does not weigh such a surficial coincidence of their thoughts so much, for he insists of the significance of "Idea of Ages" that really brings forth thoughts. Then, how did their historical situations of "Idea of Ages" differ?

In this little paper, we would like to argue that the differences of their thought spring from difference in their advocacy of creation of topics under tense relations, with Vico versus Deskartes, Dilthey versus Kant or Neo-Kantians, and we would also like to consider the causes of differences of their thoughts that superficially appears to coincide.

Key words: Vico, Dilthey

I

オルテガ・イ・ガセットは、大層面白い考えを『ウィルヘルム・ディルタイと生の理念』(佐々木孝訳、未来社、1984年)の中で述べている。曰く、「ある理念の創始者たちにとって真のまぎれようもない源は、人類の連続性が到達した知的運命の水準である。したがって、理念の断片は、地理的にきわめてかけ離れた地点から、たがいに知り合ったことのない人たちによって発見される。その唯一の共通点は、人間の知的経験段階における水準のそれである。」(11頁) 彼は、R.デカルトのコギトに似た考えが聖アウグスチヌスに観られる、また、サモスのアリストアルコスがコペルニクスの地動説の先行者と観られるという事実にも拘らず、それらの類似性は通常考えられるであろう様な同一性を必ずしも示すものではない、ということ述べる。

確かに、聖アウグスチヌスのコギトはデカルトを通じて再評価され、アリストアルコスの地動説はコペルニクスによって遡って正しいとされるが、先行するこれらの考えは、例え同じ様に

見えても、後の人々が問題にし解決を図るところと同一の水準に至ってのことと考えられるものでは必ずしもない。

II

では、私たちが以下にみる、ジャンバッティスタ・ヴィーコとW.デイルタイの類似的な連関はどのように観られる可きであろうか。

デイルタイは、

- 1) 人文諸科学の対象は、恒常的法則に従うが故に自己同一のままにとどまる自然ではなくて、人間がそれを科学に作り上げる事ができる前に先ず創造しなければならなかった制作物や慣習の総体である事、即ち、人間が創造したのは自然ではなくて社会的世界である事、
- 2) 従って、社会的世界の学としての人文諸科学は、論理学に基づいて構成される一つの全体、われわれの自然認識の構造に類似した構造の全体、を形づくるものではない事、
- 3) 人文諸科学の総体はそれが歴史的に発展してきた通りに見ることが必要である事、を述べる。

ヴィーコにも既に1) 3) と同じ発想がみられる。即ち、「この社会は確実に人間によって造られたものであるから、その原理は我々の人間精神そのものの変化様態のなかに求めることができ、またそうでなくてはならない」(『新しい学』清水純一・米山喜晟訳、中央公論社(世界の名著33), 1979年, 156頁)「諸民族の世界即ち文明社会を造ったものは人間なのだから、この「学」を究めることのできるのは人間なのである」(156頁)、「諸民族からなるこの世界を上げているのは人間であるが[私はこのことを、……、議論の余地なく本書の第一の原理とした]、……。」(550頁)

2) については、どうであろうか。私たちはヴィーコがデカルトの敵対者であったことに、この考えとの親近性を認めようか。

デカルトは周知の通り科学理論の創始者とも見做される。デカルトは一切を疑がった後、コギト・エルゴ・スムに疑が得ない基点を発見し、その理由を「明瞭かつ判明」であるが故にと考える。かような明瞭かつ判明に精神に現れるものを彼は明証的に真理であるとし、確実な認識に至る方法がここにあると考えた。数学(幾何学)をその表徴として展開する彼のその後の論証についての論議はしばらく置いて、私たちがここで注目すべき事は、そこでは確実であることと真理であることが等しく考えられているという事である。

また、デカルトが哲学に於いて展開した心と身体、精神と物質の存在の平面に於ける二元論は、以後、「身体」「物質」に於いてのみ確実な学が成り立つという論を生じる。即ち、自然学に於いてのみ真理を語り得るとする「自然主義」の萌芽がデカルトに観られるのである。

ヴィーコはこのようなデカルトの考えに真っ向から反対している。先ず彼は次のように考え

る。事物はそれを作り出したもののみが最もよく認識しうる¹⁾。事物(自然)は神が創り出したものであるから神のみが最も深く完全に認識しうる。それに対して人間に認識できるものは人間が創り出したもの(例えば幾何学)である。「私達は幾何学の命題を証明することが出来るでしょう、なぜならば私達がそれを創ったからです。もし私達が自然の学(physics)の命題の証明を与えることが可能であるとするならば、私達は、同様に、それらが無から(ex nihilo)創ることが出来るということになるでしょう。」(Vico, G.: On the Study Methods of Our Time, tr. by Elio Gianturco, Indianapolis, Bobbs-Merrill, 1965. p.23)そこで、真理についてヴィーコは、自然についての神の知識は絶対的に普遍的に確実な知識、真理であろうが、人間社会について私達の得る知識は、人間とその運命とがそれ自身で曖昧で偶然性に左右されやすいだけに、絶対的に確実な真理とは成り得ず、蓋然性の内で考えられる真理となると考える²⁾。ここで私たちにとって興味深いことは、ヴィーコが、確実性と蓋然性とを対比させ、学は各々独特の様相を持つことを示唆していることである。デカルトが、確実なもののみを真理と見做し、幾何学をもって学の典型と考えるのみならず、更に、幾何学と自然学とが真理の学であり、あらゆる学はそれらに観られると同じような手続きを経て真理へと至らねばならないと主張するとき、それは真理の曲解であり、諸学の依って立つ根拠の一元化を、学であることの権利の誤解と狭小化をもたらすものとヴィーコには感ぜられるのである³⁾。

ヴィーコは、かようにデカルトの所説に反対し、

- a) 私たちは自然については真理を語り得ない、
- b) 私たちが真理を語り得るのは私たちが無から作り出したものについてののみであり(例えば幾何学)、
- c) 歴史に於いて私たちが観るもの(人間の学)は人間とその運命が蓋然的なものである以上、その学の言表は蓋然性の中に、蓋然的な言表の集積であるに留まる、と主張し、「言語学」(filologia)を、現在の用法で言えば「社会科学」や「歴史」に相当する学を、提唱し展開した⁴⁾

(しかしながら、その際、ヴィーコは、人間の為すところは常に同様な経過を持つはずだという想定の下に、歴史を通じて、人間が作り出したものの比較考察を行うことを以って、蓋然性を持ちながらも人間のあり方を知る上で到達しうる「確実なるもの」(il celto)へと近づき得るという期待を抱き、その作業を行う。私たちはここにまたヴィーコが、3)で私たちが観たディルタイと似た方向を歩んだ姿を観ることが出来る。)

かくして、私たちは、一種独特の考証ではあるが、かような分類と学問観の故に、ヴィーコを、ディルタイに先んじて社会科学の対象としての人間の「生」を発見し、その独自性を強調する考えを等しくした者となし得よう。

思想史の流れは、ヴィーコのこのような努力を一時忘れる。ヴィーコの業績を思い起こさせるディルタイの思想を観る前に、私たちはヴィーコの時代に比しディルタイがどのような思想状

況の地平にいたかを知るため、ヴィーコとデカルト以後の、認識思想の引き続き展開を觀、歴史的場の異なりを先ず觀ていこう。

III

17世紀からの自然科学の急速な開花は、学問の世界の中に自然学と人間の諸科学とのずれを惹き起こす。自然科学のめざましい発展とそれに比しての人間の諸科学の停滞は、同じ学という名で呼ばれるこの二つの学問群の不均衡をもたらす。その一つの解決方向は、この二つの学問群の間に決定的な対立があるとは觀ず、自然科学に於けるその規範と方法をあらゆる学問の模範と見做し、それを以て人間の諸科学を遂行するという科学論的な考え方であり、他の方向は、デカルト的な存在的区分に従って、それに方法的区分を重ねる、即ち人間の諸科学の特殊性を認め、自然科学とは異なる方法論を主張するというものである。人間行動に於ける目的性を重視し、精神的現象の独自性を強調し、かような現象の記述に実験・觀察等の方法・手段を否定し、自然科学と同一の地平での論議を無意味と考える後者のこのような試みは、人文科学あるいは精神科学の独自性・自立性を主張するに至る。

しかしながら、この後者の方向の試みは常に同じ様相を呈するものではない。精神科学・歴史科学・文化科学等々と称されるとき、それらは、対応するものを必ずしも明確に持つとは限らないが、あるいは対象の異なりについての意見や、あるいは異なる方法論の意見を予定し、名称がその差異を暗示するものとなっている。それらは皆それぞれの意義を持つものであるが、私たちはここでは端的にデイルタイの組する精神科学が構築される途がどのようなものであったかを振り返り、その意義を確認していこう。

1) 周知の如く、I.カントは学の可能性は対象の認識の可能性に従うと考えた。その認識は直観の能力としての感性と、思惟の能力としての悟性が共同して働くことに依って成り立つと考える。人間の認識は、直観のみに依っても思惟のみに依っても成立せず、直観に依って与えられた材料を思惟が概念によって統一することに依って初めて成り立つ。感性のアプリオリな形式としての直観と、カテゴリー（範疇）と名付けられる悟性というアプリオリな形式とによって、普遍妥当性を持った総合判断が、認識が可能となる。かようにカントは理性批判を企て、私達が普遍妥当性を以て何を語り得、何を語り得ないかを論じた。彼の認識論は普遍妥当性の可能性を語るものである。論理必然的ではないがそこから求められてくるのは、普遍妥当性が同時に客観性を、さらに真理を付与されるということである。

自然科学が未だその原理について反省を持たず、私達の感覚が私達を欺くこと無く外界を私達に伝え得るものと見なされ、理性が大文字で書かれ、（理性への批判ではなく）理性の存在並びに普遍性に未だ批判が生じない時代のことである。それゆえ普遍妥当性が、かような地位につく可能性は充分にあり、不可能とは考えられなかった。ここでは原理的に認識が不可能とき

れた自然科学以外の学は、実践理性が働くところとされるが、認識としては求められないものとなる。

2) マールブルク学派あるいは西南ドイツ学派に代表される新カント学派の人々が、この状況に対し、自然科学以外の学の根拠付けの、認識の成立の可能性を求めてすぐに立ち上がる。その可能性はカントが構成した認識理論の一部を改変することに於いて求められる。自然科学が非ユークリッド幾何学の成立やニュートン力学以外の物理学の可能性を観て、素朴な実証主義から脱する頃である。

マールブルク学派のP.ナトルブに於いては、純粹思惟が、客観的(学的)世界を「根元から産出する」無限の動的進行過程を以って学的認識であるとする。カントの範疇を、絶対の合理性に究極すべきこの運動の「型」ないし方向であると考え。また同学派のH.コーヘンは数学・自然科学を成り立たせるものは論理学であるが、それは因果性という論理的アプリアリオリを持つに対し、法学・精神科学を成り立たせるものは倫理学であり、それは自由という道徳的アプリアリオリを持つと考えた。直観と思惟との共働により認識が成立するとするカントに対し、直観を思惟の中にも含ませ認識を成立するものとする思惟一元論の図式として構想される。

西南ドイツ学派のヴィンデルバントは『歴史と自然科学』に於いて、自然科学的手続きとしての法則のみを取り扱う「法則定立的」科学と、全く一回的なものの「個性記述的」科学との差異を論じ、自然科学にあらざる学の分野をこれに当てるが、そこではその学は合法的なものとして認められず、カントの学的認識の型から離れる。原理としては同様に、同学派のH.リッケルトは、自然科学では価値や意味を離れた自然を対象とする普遍的概念構成が行われるのに対し、他方の学科はその一般化的手続きのみではなく、意味に満ちた価値関係的文化を叙述するのだとする。そこにおいてははっきりと語られることは、「精神」を取り扱かう科学とは、物理的並びに心理的諸現象の総体たる感性界のみを論ずるを以って足れりとせず、およそ世界に於いて「意義」または「意味」を有するものであって、「外的」感性知覚によっても「内的」感性知覚によっても把握されない、ただ非感性的にのみ「了解」されうるところのものを問題とし論ずる科学だ、との主張である。ラスクは、経験的に直接体験し得るものとしての所与を分析することによって思惟の所産としての概念が構成されるとするが、それゆえ、その時「経験的に直接体験し得る」ものの中には、非感性的なものも、価値を含んで入れられる。

これら瞥見した新カント学派の一部の人々の考えは、皆、カントの認識論の枠組みの中から導き出されるものとして、カントの基本的な枠組みを崩すことなく、果たされる試みと考えられた。

IV

時代を同じくし、同様な問題に促され、ではディルタイは、如何なる意味で精神科学を構築

しようとしたのであろうか。以下にこれを観ることとしよう。

デイルタイもまた、自然科学の可能の根拠の反省を、さらに歴史・国家・社会・宗教・芸術の科学(=精神科学)の主張は如何にして可能か、を考える点で、認識論的課題を抱え、認識批判を行う。

「すべての科学は経験科学であり、「経験はすべての根源的な連関とそれによって規定された妥当性とをわれわれの意識の諸制約のうちに」もつ、とする点でデイルタイはカントと一致し、デイルタイも亦、意識の諸条件の中に経験を見いだそうとする。しかし、意識の諸条件が何かについては、カントの見解と異なる。デイルタイは続けて次のように述べる。「<経験は>、……われわれの本性の全体のうちにもつのであって、この中に経験が現れるのである。」(デイルタイ『精神科学序説(上巻)』山本英一・上田武訳、以文社、1979年、12頁) 全体的人間について歴史的ならびに心理学的研究を進めると、単にわれわれの認識能力の厳密なア・プリオリ性を想定しただけでは答えを得ることはできない、という結論に至る。そこでデイルタイは、欲し、感じそして表象する存在者の構成諸力の多様性のうちにそれを基礎づけねばならない、と考える。即ち、ここではデイルタイは意識の諸条件を、あくまで我々の本性の全体性から観ていこうとしている⁵⁾ 経験や認識をたんなる表象に属する事実から説明していくのではなく、「認識やその諸概念(たとえば外界、時間、実体、原因)を説明するにあたって——たとえ認識はこれらの概念をたんに知覚、表象および思惟という素材だけから作りあげるようにみえるにしても——いろいろな力を具えたこの全体的人間、この意欲的感情的に表象する存在者を、説明の根底におくようになったのである。」(同13頁) かくしてデイルタイは「ロック、ヒューム、およびカントが構成した認識主観の血管を流れているのはなまの血液ではなく、たんなる思惟活動としての理性の薄められた液にすぎない⁶⁾」(同13頁)と述べるに至った。

デイルタイにあっては理性は、単なる論理的把握の能力ではなく、人間を理解する能力、つまり人間及び人間によって創造された社会・歴史を理解する能力としても考えられているのである。以下にその骨子を観る。現実というものに対する私達の問いかけは、単に認識的な行為のみではなく、そこを生存の場にするものの働きかけである。しかしそれは自然と歴史的・社会的現実の切断を言うものではない。現実には常に同一である。さて、歴史的・社会的現実とは人間の本質としての精神的生命あるいは「生」が、歴史・社会・文化として、客観態として現れるものを示す。(それゆえデイルタイが追求する人間は、無時間的な本質存在としてではなく、時間の内に具現化・具体化された人間である⁷⁾) 方法上の区別として、自然は要素や法則から「説明」され、自然科学として表わされるに対し、「生」の生み出したもの、生の客観態あるいは客観的精神は「了解」され、精神諸科学として表される。(この了解という学の手続きが解釈学として、精神科学の方法論として示される。) このようなデイルタイの考え方は、カントの認識批判に即して言えば、カントが純粹理性批判、即ち物理学的理性批判を行うのに対し、歴史・国家・社会・宗教・芸術の科学はいかにして可能かを考えるものである。従って彼のテーマも

認識論的であり認識批判であるが、歴史的存在を考慮する限りに於いて、歴史的理性批判を提示するものと言えよう。

V

ではヴィーコに於ける科学論の根拠は如何なるものであったのであろうか。私達はここで再びヴィーコの主張に耳を傾け、その考えを整理し、デイルタイとの隔たりをみていこう。

経験は意識の諸条件に制約されて認められる。しかし意識の諸条件が経験を生み出すのではない。まして、私達の意識は単に知覚のみに基づくものではない。現実としての経験が、私達の直面し論じるべき問題である。

さて、現実認識の普遍妥当を考えるとき、それは何に基づくものであるのか。既に観たように、「明瞭かつ判明」のスローガンの下に、デカルトは、幾何学から発し、その構成に於いて諸科学の真理性を考えた。もちろん、人間の為す行為とその集積を対象とする社会の学に於いてもかような真理観は主張されよう。真理の認識は、その対象の何であるかを問わず、「明瞭かつ判明」な地点より、各人が生来的に保持すると想定された理性を適切に（演繹的に）行使することにより、果たし得る。即ち理性を演繹的に使用することによってのみ真理に至るとすることのようなデカルトの方法は、従来為されていた権威と伝承を踏まえた現実分析を否定し、「正当な」認識世界を造り上げる。思想家の書き残した書物や古代からの伝承に基づいて為される思索は、その論述や伝承が確実な根拠を持たず、その真理も、あるとすれば蓋然的なものであるに過ぎないと考えられることから、何らの証明も持たない営為として遠ざけられることとなる。（これは、直観的把握としての真理の獲得の可能性を全面的に否定するものではないが、方法として否定するものである。この考えからは、ひいては、把握された真理の継承の不可能に行き着く。把握された真理が、真理であるか否かの判別基準を欠くが故に。）ある意味に於いてデカルトのそれは、私達の「生」についての蓄積され真理と見なされた一切を否定する非歴史的な認識を要求するものである。しかし、デカルトのように考えると、その思想に於いて「明瞭かつ判明」な地点はどこに発見しうるのであろうか。それを欠くと、デカルトが語るようには、社会科学の認識は論じ得ないものとなるのであるが⁸⁾

デカルトの幾何学の学たる由縁の主張を、先にみたようにヴィーコは、操作的整合性から求められるものと考えた。操作的整合性を以って、真理主張が為され得るものと観る。しかしヴィーコはこの真理観を肯じない。というよりもヴィーコは如何なる（人間の英知の発現としての）真理観も採らない。そもそも真理は、ヴィーコのその時代になお力強く影響していた考えであるが、神の属性だとの考えがあり、ヴィーコもそれを認めているように見られる。それゆえ、人は真理に至るには恩寵或いは啓示が必要であり、それなくしては確実性に至り得るに過ぎない、とヴィーコは考えたのである。幾何学が「明瞭かつ判明」に感じられるのは、われわれが

その世界（及び規則）を創り上げているからである。即ち、何を正しいとするか予め決め、その中で操作しているからである、と。ならば、自然は神の創り上げるものであるが故に、創り上げる過程を知らないわれわれは自然の真理を知ることはない。われわれの知り得るものは、われわれが無から創り上げ、その材料と過程を熟知しているものに限られる。かくして、風土や慣習、時代に応じた文化的所産は紛れもなく人間自身によって作り出されたものであるが故に、われわれの創り上げた世界の事象としてわれわれはそれを知り得る。それに対し、自然についてのわれわれの知は、あくまで蓋然的な知にとどまり、われわれはそれを真理として知り得ることがない、と。

ヴィーコにとっては、人間の思索の対象は、恒常的法則に従うが故に自己同一のままにとどまる自然ではなくて、人間がそれを科学に創り上げる前に先ず創造しなければならなかった制作物や慣習の総体である。惑星は人間の意思から独立に存在しているが、例えば、法はそうではない。と言うのはイェーリンクが明らかにしたように、ローマ法の科学が可能となる前にローマ人が或る型の法を制定していなければならなかったからである。政治科学、経済科学あるいは宗教の諸科学についても事情は同じである。人文諸科学は、論理学にしたがって構成される一つの全体、われわれの自然認識の構造と類似した構造の全体を形作るのではない。人文諸科学の全体はまったく別様に発展してきた。それでヴィーコはその総体を、それが歴史的に発展してきた通りにみる必要があることを述べる。ヴィーコはかようにして「人間の生という問題を発見し」た。その前提として想定されるのは、人間はそれを認識する能力を有し得るのだ、というヴィーコの洞察である。

しかし、それは、伝統的な考え方、即ち、作者こそ全てを良く知り得るのだ、という考え方に立脚するものである。私達が自然学と幾何学との私達の関わりに観た“factum ipsum vorum”（真ナルモノハ創ラレタモノ）の考えがこれを低礎するのであるが、その考えは、デカルトに言わせれば、やはり一つのドグマであろう¹⁰⁾

更に、作者（創造者）こそよく知り得るといふとき、では作品（被造物）を他の者が理解することは可能であろうか。また、過去の時代を後世の人間はどのようにして知り得ようか。換言すれば、過去の人間が作り出したものを、異なる時代の人々はどのようにして知り得よう。ヴィーコはこの時一つのドグマをまた引き入れている。即ち、一定の人間性が存在する、という考えである。それは、人間が理性的省察なしで共通に感じる本性的判断である「人類の共通感覚」である。これを基にして、その変化の法則を知り、変化の度合を測りつつ歴史を觀れば、歴史の意味が、ひいては人間の文化的所産の意味が解明されるとされる¹¹⁾（デカルトの新しい学を一時受け入れたヴィーコがその残滓を止めるとするならば、「人類の共通感覚」を「明瞭かつ明白」なるものに擬した点であろう¹²⁾）

しかし、このような二つのドグマとそれを低礎する考えは、従来の生活世界で十分に認められるところ（常識）であるが、このような常識的考えがまさに、一切を疑がうと宣言したデカ

ルトの否定したところであり、ペーコンがイドラとして排するところであった。それゆえその提言が一般的に認められるのみではなく真理でもあると主張されるとき、その真理主張を正当化する作業がすぐに必要とされる。ヴィーコが正面から克服すべき思想家はデカルトであり、その思想であった。ヴィーコはそれを行なっているように見えるが、実はそうではない。かなりなスレ違いがある¹³⁾

デカルト以後、理性的認識の絶対性は疑い得ない基点となり、学が学であることを主張するためには、理性的認識が如何なるものであるかを論じておくことが科学論の主題となる。知識を論じるとき、私達の認識能力の、換言すれば私達の理性への反省が常に要求される。「明瞭かつ明白」さをもたらすもの、およびそこから諸命題の導出の可否が問題となる。ヴィーコの想定及び目的はディルタイのそれと変わるところはないが、デカルト以後、人々が取り組まなければならなくなった学の根拠づけの問題にヴィーコがどの様に答えたのか、その答えはデカルトの提起した問題に適切に応じ得るものであったか否かを考えたとき、私達が上述の論議に於いて気づくのは、ヴィーコの、伝統的観念への回帰に際してのデカルトの問いからの訣別であり、デカルトの問いへの配慮の欠如である。

しかしディルタイはこれをすり抜けて行く事はなかった。ディルタイは、カント以後の全ての思想家がそうであるように、カントと対決することを余儀なくされたが、それはカントそのものがデカルトの或る意味での後継者であるからである。ディルタイもカントから発する。それゆえ、その論議は、認識の成立を論じるものであるが、カント並びに(一部の)新カント学派の人々が追求したような、現に在る知識の根拠づけという意味での認識論ではなく、私達の生そのものの理解を確証する認識の在り方を考えることにおいて、ディルタイは独自の解決を見出ししているのである。

VI

オルテガは生の発見とそれを直接論じることを可能とすることを以ってディルタイの功績と見なすが、では、ディルタイが追求した「生」は如何なる意味で、以前の、「文化」あるいは「精神」として捉えられたものと異なるのであろうか。

生の探求は、単に過ぎ去ったもの、従っていわゆる「自然科学」が目指すように、対象として単に外面的に一般化するものではなく、かつてそれがそうであったように、現在のわれわれにとっても直接影響を及ぼすものの探求である。ディルタイは、かくして私達の生をそのまま学の対象とすることを論じる。これを新カント学派の一人、先にみたラスクと比較するならば、その差異が明瞭に現れよう。ラスクは現象が、予め理解的に構成され、構成された諸理解の構成としての学の成立を考える。そこに於いて捉えられた現実、あくまでも「前科学的概念構成」を経たものであり、生の現実ではない。生そのものは学の対象として意識されていない

い。デイルタイはこれに対し、生そのものを語ることを考えるのである。

デカルト以後、考えられたのは、人間が持つ理性が論理的把握に役立ち、またそのために使われるべきであるという考えである。しかしこれに対して論理的把握の現実に対する限界を考え、理性に新たな意味づけを為すことが必要となる。デイルタイは、自己自身の問題連関の中で、対象を認識する能力としてのこの理性に、新しい意味を与える。理性はそこでは、単なる論理的把握の能力ではなく、人間を理解する能力、つまり人間及び人間によって創造された社会とか歴史を、即ち理性とはそこでは生を理解する能力なのであった¹⁴⁾

かような人間の理性は認識に於いて初めて現れるものではなく、既に、われわれの生活世界の構築に於いて現れる、そして現れているべきものであろう。しかし私達の世界理解は私達自身の理解であり、人間の生の理解である¹⁵⁾

以上に観てきた如く、当初、表面的な一致を看取し得たヴィーコとデイルタイの論議も、それぞれの結論に至る思弁の過程に於いては、異なりを見せているが、その変わらぬ点は、双方とも人間の生の現象に照準を合わせているということである。問題はその生に対する関わりである。

オルテガは、コペルニクス、ティコ・ブラーエ、ケプラー、ガリレオと続く物理学世界に於ける発見の展開と、ヴィーコ、ペール、ヴォルテール、モンテスキュー、ティルゴーとコンドルセとレッシング、(更にデイルタイ)、と続く歴史学的世界に於ける発見の展開との間に、ある種の類比を観ている。それに依れば、ヴィーコが生の問題の発見を、ペールが生の実在の形式の発見を、(——人間の生の日常性、即ち、習慣あるいは精神という感じ方や欲求という実質的形式の発見を——)、モンテスキューが実在の静的形式の原動力の発見を、(——人間の生が象徴に依ってではなく衝動・潜勢力により形成されるものだということの発見を——)、ティルゴーとコンドルセとレッシングが実在の形式の動的変化の発見を、(——歴史の過程を進化を観るような変化の発見を——)、為してきたとされる。(オルテガ前掲書38-42頁)

オルテガがその展開上に示すデイルタイの功績は、この歴史的变化の意味をデイルタイが理解したことである。モンテスキューは形式を現在形に於いてのみ説明したが、ティルゴー、コンドルセ、レッシングは歴史の過程を進化として把握した。しかしこの歴史性の発見にも拘らず、彼らは「歴史的なるものをそれとして眺めることに没頭し専念することが出来なかった……。」(同書42頁) オルテガはその理由を「人間が究極的には一つの“本性”，決定的かつ恒久的で不変の存在様式を所有しているという確信」に帰する。それは理性の或る形での信仰にある。その或る形での理性をもって「人間がその根元的実体に於いて“理性”であり、理性的に考え、感じ、そして欲求する」と考える限り、「そのあらゆる歴史的变化にもかかわらずそれ自身に対して同一の自然的——すなわち理性的——宗教がある。さらに自然法、本質的芸術、そして唯一不変の科学がある」という考えが表に生じ、「歴史意識”を無効にして」しまい、「実質的か

つ不変の人間を捜し求め」(以上同書43頁)ることとなる。これを理性主義として反省し、客観的に対峙するとき、歴史主義の真の働きが生じる。境

人間の生の発見とは畢竟、人間の行動がそのような種の理性のみではなく、意思、感情をも含めた形での、広義に於いての人間の理性を考えるということにある。人間のかような理性がもたらしたものが、即ち私達人間が創り出したものであり、人間の生の現れ(或いは人間の生そのもの)である以上、かような対象を持つ人間の学は、(即ち、人間とその活動を対象とする学に於いては)、かような広義に於ける理性観を必要とせずにはいない。

ディルタイの(認識論の俎上に載せ得るという意味で)発見した生は、いわゆる「客観的世界」としても示されるが、それは既に意味を持つ世界であり、その意味の理解こそが彼の問題であった。ヴィーコが追求したのも、やはり同じ世界である。ヴィーコは、しかしながら方法論に於いて、当然の事ではあるがディルタイとかなりの隔たりを見せた。ディルタイの説明と了解を基本とする巧妙な科学論を振り返るのは蛇足として控えるが、それに比してのヴィーコの科学論は、人間の生という対象を捉え、今日なお意義ある光彩を放つものである。しかしながら、ヴィーコ思想は、当時のデカルト的科学論が主流となりつつある思想状況に抗して自らを主張せんとする剩り、デカルトの功績としての学の成立の厳密さを自らに適用し反省するという点を見逃し、デカルトにより一旦否定された伝統的観念に安易に還帰したもの、と見なされ、方法の論議に至る時代状況を欠いたが為に、その時が来るまで埋もれたものと結論出来ようか。

注

- 1) 「自然界を創ったものは神であるから、その学をもちうるのはひとり神のみである……」(ヴィーコ、156頁)
- 2) 真理と確実性についてのヴィーコの見解は解り難い。「事物の真理を知らぬ人間は確実性にたよろうとする。知性が学によって満たされないならば、(選択の)意思を意識で安定させようとするのである。」(ヴィーコ、117頁)(以下に福鎌忠恕著「ジャンバッティスタ・ヴィーコ『自叙伝』【解説】——metafisica, filosofia e fiologia——」(東洋大学社会学研究所年報17号)から、同部分の訳を併記、「人間は諸事物の真理〔真実〕を知らないので、諸事物の確実〔性〕に頼ろうと配慮する。彼らは科学〔知識〕によって知性を満足させえないので、せめて意志が意識〔共感的知識〕に基づくことを欲するのである。」26頁)
「哲学は、(事象の)理を考究し、そこに真理の学が生まれる。言語文献学は人間の自由意思の根拠を観察して、そこに確実性の意識が生まれる。」(ヴィーコ、118頁)(福鎌、「哲学は理性を静観する。ここより、真理〔真実〕の科学〔知識〕が生ずる。文献言語学は人間的自由意志の成果の権威〔典拠〕を観察する。ここより、確実〔性〕についての意識〔共感的知識〕が生ずる。」26頁)
「……哲学者も言語文献学者も半人前でしかなかったことが明らかになる。つまり、哲学者は自己の理を言語文献学者の根拠によって確実にすることを怠り、言語文献学者は自己の根拠を

哲学者の理によって真実のものとする努力を怠ってきた。」(ヴィーコ, 118頁) (福鎌, 「……, 一方哲学者達は彼らの理性〔論考〕を文献言語学者の権威〔典拠〕によって確実化〔検証〕しなかったために, 他方言語学者達は彼らの権威〔典拠〕を哲学者達の理性〔論考〕によって真理化〔理論化〕しようと配慮しなかったために, 両者ともに半分の仕事しかなかったことを証拠立てている。」27頁)

かくして, ヴィーコは「このことを行っていさえすれば, …… , この「学」にも我々より一足先に想っていたはずである。」(ヴィーコ, 同頁) (福鎌, 「このことを彼らが行っていたとしたならば, …… , この〔新〕科学を思弁するに関してわれわれの先駆者となっていたことであろう。)」と, 論じている。

このようなヴィーコの見解の解釈として, バーリンは「〈われわれの日常経験〉の知識は「真」(verum)——論理的に証明し得るもの——にかかわる知識ではないかもしれないが, それでも「確実性」(certum)にかかわる知識ではある。世界についての直接の経験に基づき, あらゆる人に, あらゆる時に共通の「確実性」, すべての経験的知識の基盤になっている「確実性」にかかわるものである。」(アイザイア・バーリン『ヴィーコとヘルダー』小池銈訳, みすず書房, 1981年, 61-62頁, < > 内筆者)

とする。また福鎌は「超越神, 創造神とその摂理の人類史における実現に対する信仰ないし信念がヴィーコの言う「形而上学」である。次いで「哲学」(filosofia)の設定した「真理」〔真実〕(il vero)を「文献言語学」(filologia)は——「語源学」(etimologia, etymologia)ラテン訳してveriloquium(真理ヲ語ル学問)を活用して——発見した「確実な」文献によって「確実化する」(accertare)。他方「文献言語学」の単なる「確実」(il certo)を「哲学」はそのもっぱら「論考」的な「真理」によって「真理化する」(avverare)。前者は自然科学におけるベーコンの「帰納的検証」法に, 後者は同じく実証的自然科学における「原理」発見のための「批判」的方法に類比されてよいであろう。」(27頁)と考える。

- 3) デカルトが演繹法により真理を語るに對し, ヴィーコは「原因ヲ聞シタ」(per causas)知識のみが十全な知識であるという考えを採る。ここに, 或る意味では根元的に全く異なる学問観がある。「ヴィーコの「学」scienzaという概念は, 「原因ヲ聞シタ」(per causas)説明という観念を含み, デカルト, ヒューム, カント, 近代実証主義者たちの因果論の見方と異なった観念を含んでいると思われ, それが彼をして動機を重視する原因説へと導くのだが, ……」(バーリン, 8-9頁)
- 4) 「……, ヴィーコ〈は〉, (知り得るが解り得ない)法則に従う自然の世界と(解り得る)法則に従う人工物の世界とを区別した……」(バーリン, 20頁, < > 内筆者)
「……言語文献学とは, 人間の自由意思的選択にかかわるすべての事象の学説であり, たとえば言語や習俗や, 戦争時, 平和時における人々の行為すべての歴史を含むものである……, 哲学はこれを, …… , 学の形態に還元するのである。」(ヴィーコ, 53頁)
- 5) 「……認識することやその概念がたんに知覚, 表出, そして思考とだけ織り合わされているように見えようと, 欲し, 感じ, そして表象する存在者の構成諸力の多様性のうちにそれを基礎づけるべく……われわれの意図する方法とは……思考のあらゆる要素を, …… , 人間の本性全体に関連させることである。」(オルテガ, 59頁)
- 6) 「……・あらゆる認識の基礎である“意識の条件”がカントの場合のように知的意識の条件あるいはもっと正確には意識の知的条件であるばかりではなく同時に意識ならびに感情の条件もしくは“人間の本性全体”でもある……」(オルテガ, 62頁)
- 7) ディルタイの関心は, 理解が如何にして可能かという問題を追求するものとなり, もはや認識の成立如何という伝統的認識論の範疇のものではなくなっている。と言うのも「……・認識の絶対的な起源を求めたり認識を究極的に基礎づけるのは不可能である。〈なぜならば〉人間は, すでにあらかじめ存在している世界, 子供の時から理解している世界, 固有の考え方や価値観

- をもっている世界のなかに送りこまれている。……たとえ自分の世界を拒否したとしても、その人は何らかの伝統のなかにいる。」(O.F.ボルノー『ディルタイとフッサール』高橋義人訳, 岩波書店, 1986年, 124頁, < > 内筆者)「……現実においてわれわれは固有の人生観, 世界解釈, 価値観をもった世界, 或る特定の形につくられた世界のなかにいる……。われわれは或る伝統の中で生活していて, 子供の時からその伝統の刻印を受けている。」(同125頁)
- 8) 「もしデカルトの厳しい規格に従って物理学その他自然科学によって確立されるもののみが真の知識であるとするならば, 行動主義の基準の内にとじ込められざるを得ないし, その結果, 自然・人間同型説——人間世界と非人間世界との無批判な混同——という対極の誤謬に陥るであろう。」(バーリン, 70頁)
- 9) 「ヴィーコの全く独自なところは, 歴史とは, 人間が人間的・自然的障害を克服する闘争の過程で, 人間自身及び人の作った制度を不断に自己変革する営みである, しかもそれは人間の活動であり人間の構築したもの成行き・帰結であるから人間に理解し得る, 自然はそのようには理解し得ない, という考えである。彼の独特な説はここであり, ミシュレやクロウチェに靈感を与え, マルクスやディルタイの賞賛を勝ちえたのも, この独創的学説なのである。」(バーリン, 267頁)
- 10) 「……ヴィーコは, 自分が新しい学を発見したと信じた。即ち, 一群の一般原理であり, ここから生まれる法則を正確に適用すれば, 人間の歴史に置ける循環するサイクルの各局面の順序を, 彼の時代に良きよう様たる自然科学が物質の位置や運動の規則性を説明し得たほどに, 少なくとも原則的には, 完全に説明し得るものであった。」(バーリン, 20頁)
- 11) われわれは自ら創造したもののみを真に知り得るとするのは古くからのスコラ派の概念である。
- 12) 「人間によって作られたもの, 言い換えれば, 感覚を具えた者によって考えられ, 意思され, 想像されたものはすべて, 特定のルールに従うがゆえに, 特定の原則(それらは識別し定式化しうる)に服する, その故にこそ(神がすべてのものの究極の源であるとしても), 人間の所産は, 同じようにルールに導かれた他の人間の想像力によって把握しうるのである。」(バーリン, 80-81頁)
- 13) 「人間の自由意思は本質的にきわめて動揺しやすいものである。これが確かなものに確定されるのは, 人間にとって必要かつ有益なもの——これが人類の自然法の二つの源泉となるものであるが——が何かということについて人々が抱く共通感覚によるものである。共通感覚とは, ある一つの集団全体が住民のすべて, 民族のすべて, 人類のすべてが共通して感ずる判断で, 反省の結果生ずるものではない。」(ヴィーコ, 118頁) ヴィーコはここで共通判断を自然法に関連して述べているが, 自然法のみではなく, あらゆる部面で活用される可能性が考えられる。従ってヴィーコに於いては, 源としての(共通判断の)同一性と, その展開に於ける変化の法則の同一性が予定されているように思われる。しかしここで共通感覚をして, 万人に共通する一定不変の人間性, を意味するものと考えべきではないようである。そうではなく「……人間の本性を, 経験の流れの中の固定不変の「芯」として探し求めてはいけぬ, むしろその流れそのものに——何が, 何時, 如何なる具合いに生まれてくるか——そこに本性を見なければならぬ, ……」(バーリン, 94頁)「事象の本性とは, 必ず一定の時に一定の在り方で具現して存在となるものである。時と在り方が一定であるならば, 具現する事象もまた一定であって, 他の事象が現れるはずはない。」(ヴィーコ, 119頁)
- 14) 同様な言及として, 「精神が理解するものは, 精神が創造したものにほかならない。」(ディルタイ『精神科学における歴史的世界の構成』尾形良助訳, 以文社, 1981年, 100頁)
- またここでは論じなかったが, いわゆる精神科学の成立のためには, 人が他人を理解しうるのは何故か, という問題を解決することが必要である。しかし「ヴィーコは, わたしの知る限りどこにも, 人間が他の人間を理解する方法——「他人の心を知り」その目標・観点・思考法・

感情、行動の動きを把えるやり方——について十分明確な説明をしていない。個人にせよ集団にせよ、現存者でも故人でも、他の人々を知るのに、感情移入とか、類推の論理とか、直観とか、一体をなす世界精神への参入と言うような言葉を持ち出して、説明しようとはしていない。この点は後世の解説者達の手任せに委ねられた。彼はその主張の論拠を、人間が作ったものは、同じく人間の精神を具えた人ならば、原則として、いつでも「入ってゆく」ことができるという彼の信念に置いているのである。」(バーリン, 77頁)

- 15) 人間の認識能力の究極に至るまでの反省が生じて初めてヴィーコ思想の意義が明白となったように思われる。

(昭和63年1月29日受理)